

ダニエル書 - 第106番

審判の解明：9/11から日曜法まで-預言的分析

Jeff Pippenger

2024-02-29

生ける者に対する調査審判は2001年9月11日に始まり、執行審判はまもなく到来する日曜法の時に始まる。これら二つの審判の期間は、第三の契約の使者と第三のエリヤのために道を備える使者の働きを表している。第三のエリヤとは、ミラー運動の歴史に始まったエリヤの使者の働きの終結である。

契約の使者としての務めを成就されたキリストは、地上の文字通りの神殿を二度清めた。それは彼のからだと彼の霊的な神殿の型であった。彼の地上の文字通りの神殿は、荒野の幕屋に始まり、次にソロモンの神殿、続いてバビロンでの七十年の捕囚の後に再建された神殿、そしてヘロデが四十六年かけて改修した同じその神殿である。

神の可視的なご臨在は、幕屋とソロモンの神殿を祝福したが、捕囚後に再建された神殿には臨まなかった。しかし、その改築された神殿はキリストの肉体的なご臨在によって祝福された。ヘロデが改築した神殿の歴史において、キリストはマラキ書3章の成就として神殿を二度清められた。最初の清めにおいて、キリストはその神殿をご自分の父の家と呼ばれたが、最後の神殿の清めでは、それをユダヤ人の家と呼ばれた。

ミラー派の歴史において、キリストは1798年から1844年に至る四十六年間に霊的な神殿を築き上げた。1844年10月22日、マラキ書3章の成就として、彼は突然ご自身の宮に来られ、こうして愚かなおとめたちをふるい落としした。その後、彼は第三の天使として現れ、第二の、そして最終の清めを成し遂げるために来られたが、古代イスラエルの初めと同様に、現代イスラエルにはその働きを完成するのに必要な信仰が欠けていた。

2001年9月11日、キリストは第二の神殿の清めを成就するためにお戻りになった。その清めは、間もなく到来する日曜法の時に、1989年に封印が解かれた知識の増加を自分たちが理解していないという現実には愚かな乙女たちが目覚め、肅清されるときに成し遂げられる。その知識の増加は後の雨のメッセージを表しており、それを十人の乙女のたとえの文脈に置くと、真夜中の叫びのメッセージに当たる。1989年の終わりの時に封印が解かれたダニエル書11章の最後の六節のメッセージは、同箇所44節において「東と北からの知らせ」として表されている。

後の雨のメッセージは真夜中の叫びのメッセージであり、また東と北のメッセージでもある。東と北はそれぞれイスラムとローマ教皇制を表しており、メッセージとしては、2001年9月11日からやがて来る日曜法に至るまでの間に、ラオデキヤ的アドベンチズムによって偽って模倣されるメッセージを指す。2001年9月11日はイスラム（東）を表し、日曜法は獣の刻印（北）を表す。

不従順な預言者がろばと獅子の間で死んだ型に示されているように、ラオデキヤ的アドベント主義の死の床は、その二つの道標の間に象徴されている。獣の刻印を受け入れる者

たちの死の床は、「東と北からの知らせ」によって表されており、それは教皇権を激昂させ、神の民に対する最後の迫害を開始する。そのメッセージは、間もなくアメリカ合衆国で制定される日曜法から始まる。その場所で、かつその時に、第三の災いのイスラムが突如として襲撃する。その不意の攻撃は国家的破滅をもたらし、諸国を怒らせる。こうして竜・獣・偽預言者の三者連合の主導のもと、イスラムに対抗してすべての国々を結集させるための経済的・政治的推進力が与えられる。

第三のエリヤによって表される歴史において、第三のわざわいを示すメッセージは、竜と獣と偽預言者に対し、イスラム教が、教皇の権威のしるしを礼拝する人々を罰するために神が用いる裁き的手段であることを告げる。三つのローマ、三つのバビロン、三人のエリヤ、そして道を備える三人の使者と同様に、第三のわざわいは、三つのわざわいの三重の適用によって確立される。

そして私は見た。また、天の中空を飛ぶ一人の天使が大声でこう言うのを聞いた。「災いだ、災いだ、災いだ。地に住む者たちに、これから吹き鳴らされる三人の天使のラッパの残りの響きのゆえに！」黙示録 8章13節。

ホワイ夫人はスミスの著書『ダニエル書と黙示録』を強く推薦し、すべてのセブンスデー・アドベンチストがこの本を所有すべきだという趣旨を示した。彼女は私が今書いたほど直接的には表現していないが、そのことは彼女の推薦から読み取れる。

主は、現在の真理の光を含む書籍が頒布されるよう、文書伝道の働きに入る働き手を召しておられる。世の人々は、時のしるしが成就しつつあることを知る必要がある。彼らを啓発する書籍を彼らに届けなさい。『Daniel and Revelation』 『The Great Controversy』 『Patriarchs and Prophets』 『The Desire of Ages』 を、今や世界に広めるべきである。『Daniel and Revelation』 に含まれる偉大な教えは、オーストラリアの多くの人々によって熱心に熟読されてきた。この書は、多くの尊い魂を真理の知識へと導く手段となってきた。『Thoughts on Daniel and the Revelation』 を頒布するためにできることは、できる限りすべて行うべきである。私は、これに取って代わることのできるほかの本を知らない。それは神の助けの御手である。

「長く真理のうちにあった者たちは眠っている。彼らは聖霊によって聖められる必要がある。第三の天使のメッセージは大声で宣べ伝えられるべきである。非常に重大な問題が私たちの前にある。私たちには失うべき時間はない。私たちが些細な事柄によって、世界に与えられるべき光を覆い隠すことを決して許してはならない。」『原稿集』第21巻、444頁。

ダニエル書における「the daily」についてのミラー派の見解を退けた人々が同様に退けたその書物は、「神の助けの手」と呼ばれていた。前掲の引用で言及された書物を頒布する責任が神の民に与えられているのなら、それは神の民がその書物を自ら所有していなければならないことを意味する。その書物は、ダニエル書の「the daily」に関する「新しい」見解を推進した者たちによる攻撃的となった。というのも、彼らはその書物を書き換え、「the daily」に関する正しい見解を取り除きたいと望んでいたからである。

ホワイト姉妹は、ダニエル書の「the daily」をめぐる反乱の二人の主要な指導者に言及する際、彼ら（プレスコットとダニエルズ）には「原因から結果へと推論する」能力がないとしばしば指摘した。ラオデキアのアドベンチストの歴史修正主義者たちも、同じ問題を抱えているように見える。

1888年以降の反逆の歴史を通じて、指導的立場にあった人々は、個々の経験のどこかの時点で「the daily」という誤った教えを受け入れていた。彼らの反逆は「結果」であり、「the daily」の誤解が「原因」であった。ラオデキア的アドベンチストの修正主義者たちは、学のない人々を、アドベンチスト史におけるまさにその歴史的な反逆者たちが実は反逆していなかったのだと信じ込ませる。しかし彼らの改訂された証言は、聖書と預言の霊の証言によって決して支持されることはない。彼らはその「結果」を反逆と見なさないため、「原因」を求める可能性を閉ざしてしまう。

鳥がさまよい、つばめが飛ぶように、理由のない呪いは降りかからない。箴言 22:6.

神の民は反逆を見分け、そうと分かったときには、その原因を探らなければならない。次に、その原因を改めなければならない。次の一節でホワイト姉妹はアカンの物語について述べている。

私は、神がここで、ご自分の戒めを守る民であると公言する者たちの中にある罪をどのように見ておられるかを示しておられることを知らされた。古代イスラエルがそうであったように、神の力の驚くべき現れを目撃するという特別の栄誉にあずかりながら、なおも神の明白なご命令をあえて無視する者たちは、神の怒りの対象となる。神は、ご自分の民に、不従順と罪はご自身にとってきわめて不快であり、決して軽んじてはならないことを教えようとしておられる。また、神の民のうちに罪が見いだされるときには、神の不興が全体にとどまらないよう、直ちにその罪を取り除くための断固たる措置を講じるべきであることを、私たちに示しておられる。しかし、責任ある立場にある者たちが民の罪を見過ぐすなら、神の不興は彼らの上に臨み、神の民は全体としてその罪の責任を問われることになる。主は、過去におけるご自分の民への取り扱いにおいて、教会を過ちから清める必要を示しておられる。ひとりの罪人が、神の光を会衆全体から閉め出すような暗闇を広めることがありうる。民が、自分たちの上に暗闇が覆いかぶさっていることに気づき、その原因がわからないときには、御霊を悲しませている過ちが洗い出され、取り除かれるまで、深いへりくだりと自己卑下をもって、切に神を求めるべきである。

「神が私に存在すると示された過ちを私たちが戒めたために、私たちに対して生じた偏見、また、苛烈で厳しすぎるという声は、不当である。神は私たちに語れと命じておられる。ゆえに、私たちは沈黙しない。もし神の民の間に誤りが明らかであり、神のしもべたちがそれに無関心のまま見過ぐすなら、彼らは事実上、罪人を支え、正当化することになり、同様に罪ある者として、確実に神の不興を買うことになる。というのは、彼らは罪ある者の罪について責任を問われるからである。私は幻の中で、神のしもべたちが自分たちの間に存在する誤りや罪に対処することを怠ったために神の不興を招いた多くの事例を示された。これらの誤りを弁護してきた者たちは、明白な聖書的義務を果たすことを避けたというだけで、人々からはたいへん温厚で愛すべき性

格の持ち主だと見なされてきた。その務めは彼らの気持ちにそぐわなかった。それゆえ、彼らはそれを避けた。」『証言』第3巻、265頁。

アドベンチズムにおいて離反した指導者たちの歴史は、彼らの離反においてほとんど常に見られる段階の一つが、個人的経験のどこかの時点で「the daily」に関する誤った見解を受け入れることであった、という事実を証言している。とはいえ、スミスの著書は、神の靈感を受けたものではなく、いくつかの教理上の問題を含んでいるものの、黙示録8章と9章（そこでは最初の六つのラッパの預言的歴史が示されている）に関する開拓者たちの理解の優れた概観をなお提供している。私たちは、三つの災いの三重の適用を考察し始めるにあたり、スミスの著書『ダニエル書と黙示録』における注解に言及する。

ホワイト夫人は、ウィリアム・ミラーには『ヨハネの黙示録』について大いなる光が与えられたが、第13章および第16章から第18章に関する彼の理解は誤っていたと教えている。というのも、荒廃をもたらす勢力が二つではなく三つあることを見抜くには、彼の歴史的な視点が適切ではなかったからである。彼に与えられた大いなる光は、『ヨハネの黙示録』第2章から第9章に及んでいた。

説教者も信徒も、ヨハネの黙示録を、聖書のほかの部分に比べて不可解で、重要性の劣るものと見なしてきた。しかし私は、この書は、まさに終わりの時代に生きる人々の特別な益のために与えられ、彼らが自分たちの真の立場と義務を見定めるための導きとなる啓示であることを見た。神はウィリアム・ミラーの思いを預言へと向け、黙示録について大いなる光を彼に与えた。『Early Writings』 231。

ミラーは、教会、封印、ラッパおよび鉢についての自らの理解を次のように述べた。

アジアの七つの教会は、使徒たちの時代から世の終わりに至るまで、教会が示す七つの姿において、そのあらゆる曲折、その繁栄と逆境のすべてをたどる、キリストの教会の歴史である。七つの封印は、教会に対して地上の権力と諸王が行った事柄と、同じ期間における神の民への守りの歴史である。七つのラッパは、地上、すなわちローマ帝国に下された、特異で重い七つの裁きの歴史である。そして七つの鉢は、教皇ローマに下された最後の七つの災いである。これらに交じって他にも多くの出来事があり、それらは支流のように織り込まれて預言という大河を満たし、ついにはすべてが永遠の大海へと注ぎ込んで終わる。

これは、私にとって、『黙示録』に記されたヨハネの預言の構想である。そして、この書を理解しようとする者は、神の言葉のほかの部分についても徹底した知識を備えていなければならない。この預言に用いられている象徴や隠喩は、すべてがこの書の中で説明されているわけではなく、他の預言書において見いだされ、聖書の他の箇所でも解き明かされるべきものである。ゆえに、いかなる部分を明確に知るためであっても、全体を学ぶようと神が意図しておられることは明らかである。ウィリアム・ミラー『ミラーの講義』第2巻、第12講、178。

契約の使者のために道を備える第三の使者が、現代バビロンの裁きにおける外的な歴史を表す第三のエリヤと対照的に、教会の裁きにおける内的歴史を表しているのと同様に、教会と封印に関する開拓者の理解も、同じ内的・外的な証しを明らかにしていた。

封印は、黙示録4章、5章、6章において取り上げられている。これらの封印のもとで示される光景は、黙示録6章と8章1節で描かれている。それらは明らかに、この時代の始まりからキリストの来臨に至るまで、教会に関係する出来事を包含している。

「七つの教会は教会の内的歴史を示す一方、七つの封印はその外的歴史の重大な出来事を明らかにする。」ユライア・スミス『The Biblical Institute』253.

ユライア・スミスは、諸教会の内外の関係に関するミラー派の理解を明らかにしていたが、ジェームズ・ホワイトは並行する歴史という観点から同様の概観を示している。

私たちは今、教会、封印、そして獣、すなわち生き物を、同じ時期を覆うものとして比較できる限りまでたどってきた。封印は七つであるが、獣は四つにすぎない。そしてここで注意しておくべきなのは、第一、第二、第三、第四の封印が開かれるとき、第一、第二、第三、第四の獣が「来て見よ」と言うのが聞こえるが、第五、第六、第七の封印が開かれるときには、そのような声は聞こえないということである。また、最後の三つの教会と最後の三つの封印は、最初の四つの教会と最初の四つの封印がそうであるようには、同じ時期を覆うものとしては対応しない。しかし、これまで示してきたように、教会、封印、そして獣は、現在から半世紀余り前の時点に至るまで、ほぼ一八〇〇年のあいだについては、同じ時期を覆うものとして一致している。ジェームズ・ホワイト、Review and Herald、1857年2月12日。

私たちは先ほど、ミラー派の歴史における主要な先駆者を三人挙げた。三人とも「the daily」に関する正しい見解を持ち、また、ミラーが理解し提示するよう導かれた真理の枠組みの中で、教会、封印、ラツパの概観を支持していた。

「聖霊によって神が据えられた土台から、釘一本や柱一本でも動かそうとする者たちが現れるときには、私たちの働きの先駆者であった年配の男たちに率直に語らせなさい。また、すでに亡くなった者たちにも、私たちの定期刊行物に彼らの論説を再掲載することによって語らせなさい。神がご自分の民を真理の道へと一歩一歩導いてこられる中でお与えになった聖なる光の輝きを拾い集めなさい。この真理は、時の経過とあらゆる試練に耐えうる。」Manuscript Release, 760, 10.

2001年9月11日、ヨハネの黙示録第18章の力強い御使いが降りてきて、天から今しがた降ってきたパンを受け入れて食べようとする者たちを、エレミヤ書第6章の「昔からの道」へと立ち戻らせる働きを始めた。アルファでありオメガである方は、十四万四千人に数えられることを目指して努めることをいとわない者たちに、1840年8月11日に彼が天から下られたのは、単なる時の預言の成就ではなく、第二のわざわいに関する時の預言の成就であったことを理解してもらう必要があった。彼は、ご自分の民が、1798年から1844年までの46年間に彼がミラー派の神殿を打ち立てられた、その歴史の「昔からの道」を再発見することを必要としておられた。

その歴史は、がらくたや偽造の貨幣や宝石で覆い隠されていた。その歴史は、とこしえの岩ではなく砂の上に築かれた偽りの基礎的メッセージによって曇らされていた。それはミラー派の歴史においてであり、ペテロが述べるように、ミラー派はかつては「民でなかった」が、その後「神の民」となり、「霊的な家、聖なる祭司職」として起こされ、建て上げられたのであった。ユダの部族の獅子が2001年9月11日に降臨し、終わりの日の民

を導いて、ミラー派の神殿が起こされた歴史という「神殿」を清める働きに入らせた。その働きは、主がヨシヤ（神の基礎という意味）という名の人物を起こされると予告した預言によって型示されていた。

不従順な預言者の預言が成就してヨシヤが立てられたとき、彼は荒れていた神殿の修復に着手した。修理と清めの働きの中で「モーセの呪い」が見いだされ、それがヨシヤの前で読まれると、ヨシヤの改革がもたらされた。私たちは、その預言を、2001年9月11日以後における「七つの時」の再発見と関連づけて取り上げる。

次回の記事でその研究を始めます。

真理を唱える者たちがサタンに仕えている限り、彼の地獄のような影が、神と天を見る彼らの目を遮ってしまう。彼らは初めの愛を失った者ようになる。彼らは永遠の現実を見ることができない。神が私たちのために備えておられるものは、ゼカリヤ書の3章と4章、そして4章12節から14節に表されている。『わたしはさらに答えて彼に言った、「二つの金の管を通して、自らのうちから金の油を注ぎ出しているあの二本のオリーブの枝は何ですか。」

彼はわたしに答えて言った、「これらが何であるか、あなたは知らないのか。」わたしは言った、「いいえ、主よ。」すると彼は言った、「これらは、全地の主のそばに立つ二人の油注がれた者である。」』

主はあらゆる備えに満ちておられる。主に手段の不足はない。私たちの信仰の欠如、地上的な心、軽薄な言葉、会話に現れる不信のために、暗い影が私たちを取り巻くのである。キリストは、全く美しい方、万の中にひとときわ優れた方として、言葉や品性に現されていない。魂が虚栄に向かって自らを高ぶらせることに満足しているとき、主の御霊はそのためにほとんど何もしてやることができない。近視眼の私たちは影こそ見ても、その彼方の栄光を見ることができない。御使いたちは四方の風を押さえている。四方の風は、怒れる馬に警えられ、手綱を振り切って地の全面を駆けめぐろうとし、その跡に滅びと死をもたらそうとしている。

私たちは永遠の世界のまさに瀬戸際で眠っていてよいのだろうか。私たちは鈍く、冷たく、死んだようになっていてよいのだろうか。ああ、私たちの教会において、神の霊と息がその民に吹き込まれ、彼らが自分の足で立ち上がって生きることができますように。道は狭く、門は狭いのだということを私たちは見極める必要がある。しかし、狭き門を通り抜けると、その広がりには限りがない。『Manuscript Releases』第20巻、216、217頁。